

## 3年生2学期以降 入試に万全で臨むための……

# 受験体制を整える ステップ

### 1 step 夏休み明けのフォロー

9月の時点で「夏休みは計画通り勉強できた」と満足している生徒はそれほど多くない。「3年生の夏休みは受験の天王山」という思いから、「1日12時間勉強」「全教科総ざらい」などの大きな目標を立てて夏休みに臨んだが、なかなか計画通りに行かず、焦っている生徒が少なくないのではないだろうか。したがって、夏休み明けには、こうした生徒の精神的ケアと仕切り直しとなる具体的な学習方法の提示が必要となる。夏休みに勉強が十分にできなかったと落ち込んでいる生徒も、無理な計画が実行できなかっただけで、実はそれなりに勉強できているはずである。そういう生徒にはできなかった部分にはなく、できた部分に目を向けさせるとよい。例えば、夏休みに使った参考書や問題集の学習した部分を確認しながら、「これだけやっているじゃないか。絶対に力が付いているはず」と自信を持たせるのも一つの方法だろう。

こうして夏休みまでの成果を踏まえて2学期以降の学習計画を月間、週間単位で新たに細かく立て直させる。生徒のケアには個人面談が最適だが、年間の面談予定以外に新たな枠を設けるのが難しい場合、昼休みや放課後などを活用するようにしたい。

精神面と学習面の両面のケアを「できた部分」を再確認させる  
具体的な学習計画を立てさせる

### 2 step 模試の活用法の提示

模試の回数が益々増えてくる2学期以降は、模試の位置付けとその活用法について繰り返し指導する必要がある。「できた、できない」で一喜一憂する生徒が少なくないからだ。

特に夏休み中に多少なりとも勉強した生徒は、休み明けの模試ですぐ成果が出ることを期待しがちだ。そして、期待通りに点数や偏差値が上がらないと「あれだけやったのに……」と自信を喪失したり、ちょうどこの時期に募集要項が送られてくる推薦入試に安易に走ったりすることがある。

しかし、たとえ数字の上では結果が出ていなくても、答案の自身に夏休み中の成果が隠れていることがある。例えば、休み中に物理の「物体の運動」は勉強を終えたが、「電気」はまだだつたとする。休み明けの模試で「物体の運動」は答えられたが、「電気」はできなかった場合、点数は休み前とさほど変わらなくても、勉強の成果は現れたと言える。

9月の時点で大切なのは、学習が終わった箇所と終わっていない箇所をは

っきり区別できることである。「電気」の分野はこれから勉強すればよいのだから、決して自信を失うことはない。そのことに自分で気付く生徒もいるが、点数だけにとらわれている生徒にはきちんと気付かせて自信を持たせてやりたい。

点数の「伸びしろ」を生徒に具体的にを見せてやる方法もある。その生徒の目の前で、このケアレスミスもなくせば何点増えた、あと一步の問題ができていれば何点増えた、点数を積み上げてもう一度得点を計算してやる。そして、改めて模試の基礎データに当てはめて偏差値や合否判定を出してみる。そうすると偏差値が上がり、判定もDからCへ、CからBへと変わることがある。生徒は、あと一步でこれだけ成績が伸びるか実感でき、やる気を引き出される。

模試には、現在の自分の到達度と弱点を把握し、今後の学習に役立てるための教材という側面がある。偏差値や合否判定を見るためだけのものではないことをしっかり伝えたい。

教材である以上、模試は受けつつにせず、復習することが大切である。解答・解説を見て自己採点し、できなかった問題・分野についてはきちんと復習するという勉強の流れを、この時期に徹底させたい。言うまでもなく、模試の問題は、各分野の基本や頻出の部分を押さえて出題されているため、類題が本番で出る可能性も十分にあり得る。模試は「宝の山」である。それを上手に活用することの大切さを認識させたい。

とは言え、実際は模試の結果が返ってくるまで、生徒は偏差値や合否判定に一番関心があるため、そこしか見ない場合が多い。特にマーク模試の場合は答案が返ってこないのもその傾向が強いようだ。その問題ができなかったのは、時間がなくてマークできなかったからか、誤答だったからか、誤答ならケアレスミスか純粹にできなかったのかなど、問題と突き合わせて復習するように指示しておきたい。

模試を通して学んだものは、定着率も高いようだ。自分で漫然と問題集をやつてすぐ解答を見たりするのには比べ、模試では入試本番にも似た緊張感と集中力が要求される。その分、模試チェック、復習をしっかりやれば、内容が身に付きやすい。

#### 模試の個人成績票の有効活用法

模試の個人成績票には偏差値、合否判定だけでなく、成績に対する分析などが載っている。これらを有効に使って現時点の学力、志望校に対する到達度などを確認するよう生徒に伝える。例えば進研模試の場合、次のような点に注目させたい。

一口にC判定と言っても幅がある。自分の位置はBに近いCなのか、Dに近いCなのかを確認させる  
志望校別の設問成績を確認し、同じ大学を志望する者の中での設問別の成績を把握させ、自分の弱点、つまり強化すべきポイントを発見させる  
志望校の配点で集計し直した得点を確認し、合格までの教科ごとの到達度を見る。志望校の入試の内容に合わせて各教科の評価を分析する

毎回、目標を持って模試を受けるのも大切なことだ。特にマーク模試は、センター試験に沿った内容で出題されるため、各分野ごとの目標点を具体的に設定して取り組むようにするとよいだろう。

合否判定に一喜一憂させない

夏休みの成果を分析させる

点数の「伸びしろ」を見せる

できなかった部分を分析させる

模試の復習で定着率を高める

模試に具体的目標を持たせる

## がんばるクラス作り

step 3

クラスの雰囲気、生徒個々の学習態度に与える影響は大きい。クラス全体があきらめたり、弱気になったりせずに「最後までがんばる集団」となるようにすることが大切となる。特にこの時期は推薦入試を受ける生徒に引張られて目的のないまま安易に推薦入試を希望したり、志望校変更を考える生徒が出てくるので注意が必要だ。とりわけ成績上位の生徒が推薦入試を希望するとその傾向が強まるようだ。クラス全体の雰囲気をトーンダウンさせずに、入試に向けて意欲を盛り上げる工夫が求められる。step2で述べたように、生徒に「伸びしろ」を見せるなど自信を回復させるようにしたい。クラスの雰囲気作りの面では、放課後に生徒と一緒に勉強させて、皆でがんばるといふ雰囲気にするのも有効な方法だ。家で1人で勉強していると不安になりがちだが、それを防ぐこともできる。教師から「放課後、教室に残って勉強したらどうか」と声をかける

のもよいだろう。できる生徒には、他者に教えることで自分自身の知識が整理されるといふメリットを強調して、その輪の中に加わるようにさせる。

また、クラスには「この生徒が勉強を始めると雰囲気が変わる」というムードメーカーがいるものだ。特に、それまで部活ばかりやっていたような生徒が突然勉強を始めると、「自分もやらないと……」とクラス全体の雰囲気が変わることがある。こつこつムードメーカーが早く誕生すると、よい刺激となる。個人面談のときにその生徒の変わりようを暗にほめかせば、聞かされた生徒がやる気を持つこともある。とは言え、実際は教師が指摘する前に、ムードメーカーの勉強ぶりから他の生徒が既に刺激を受けていることの方が多いようだ。

最後までがんばるクラスを作る  
推薦入試に安易に流れさせない  
ムードメーカーを利用する

## 基礎固めの学習指導

step 4

(9月~10月)

2学期に入ると、まだ基礎固めができていないのに、焦りや不安から新しい分野や、志望校や難関大の過去問題に手を出して、歯が立たないために一層焦るといふ生徒が出てくる。この時期にそうした問題ができないのは当然であり、それより自分の学習の進み具合をしつかり把握させ、基礎が十分できるまでは、遠回りに思えても基礎固めをしつかり続けるように指導する。

基礎固めが必要な科目については、家で勉強する際に、教材は教科書より実力に合った参考書の方が適当だろう。教科書は基本的に自習向けに作られてはいないので、章末問題も解答や解説が掲載されておらず、1人で学習を完結させられない。それより解答(略解ではなく、きちんとした解答)と解説が詳しく書いてある参考書、もしくは問題集の方が役立つはずだ。場合によっては、その生徒にふさわしい参考書名を教師が例示してやるのもよいだろう。使い方としては、まず問題を解いてみて、解けなかつたら解答と解説を読んでみる。そしてもう一度その問題

に挑戦する。それを繰り返して、その分野の問題と解き方のパターンを覚えるようにさせる。

2学期は、それまでの国数英中心の学習から理科、地歴、公民にも比重を置いた学習に変えていく時期でもある。本格的に理科、地歴、公民の受験勉強をするのが初めての生徒の場合、どのくらい学習に時間を充ててよいのかわからないことがある。まず実際にその科目の特定分野(あまり一生懸命に取り組んでいなかったと思われる分野)を勉強させてみて、世界史ならどのくらい、化学ならどのくらいの時間が必要が見当を付けさせる。そこから逆算して、必要な国数英を含めた学習時間を修正させる。高校入試では理科や社会は比較的短時間で勉強を終わらせた生徒もいるが、その感覚を大学入試まで引きずって、安易に学習時間を設定することがないように注意させたい。

過去問題よりも基礎固めを  
基礎固めには、教科書より参考書を  
理科、地歴、公民の比重も高める

## 夏休み明けからの進路指導

step 5

(9月~11月)

漠然とした「志望校」から、より入試を意識した「受験校」へと照準をはっきりさせる時期である。9月1日にはセンター試験の受験案内が出るので、夏休み明けに生徒への配付を兼ねた説明会を開き、受験意識を高めるのもよいだろう。だが、生徒はどこを受けるかまだ決めかねている場合が少なくない。特に成績中位層から下位層に「あこがれ校」を目指し続けるか、それとも志望校を変えるか……と揺れる生徒が見られる。いずれにせよ、受験校決定に対する姿勢、意識は生徒によって様々なので、個人面談などの個別対応が中心になる。

受験校決定までの指導で重要なのはあこがれ校をあきらめさせるような指導は避けること。進路指導の要点は生徒の可能性を広げてやることにあり、たとえ成績面ではあこがれ校の合格が厳しい場合でも、「その大学はやめた方がいい」といふ言い方は避けたい。特に夏休み明けの模試の結果が悪かった場合、生徒は弱気になりやすいので、希望を持たせるようなケアが求められる。

。逆に模試の結果がよい生徒に対しては気を引き締めることも必要だろう。希望を持たせてがんばらせる一方、あこがれ校に失敗した場合の現実的選択肢(併願校)も考えるように仕向けたい。受験校の幅を広げるのは、戦略として大切なことである。ただし、国立大の場合には受験できる数が決まっているので、併願パターンは慎重に検討する必要がある。私立大については生徒の希望を受け入れ、できるだけチャンスを広げられるように、受験校を決めていきたい。

受験校について保護者の理解を得ておくことも大切だ。特に地元を離れた大学の受験については、経済的な問題や子どもを遠くへやりたくないなど親の心情が絡んでくる。早い段階で家庭内のコンセンサスを得るよう生徒に伝えておきたい。教師の側も、保護者面談などで確認しておくことが必要だ。

最終的な受験校を考えさせる  
「あこがれ校」をあきらめさせない  
受験校への保護者の理解を得る

## センター試験までの学習指導

step 6

(11月~1月)

多くの受験生は、センター試験の1か月前からその対策一辺倒になるので、それまでにある程度2次試験の実力を付けさせておきたい。と言っても、2次試験の過去問題をやらせるといふことではなく、あくまで2次試験に耐えられる力、具体的には答案を書く力、記述試験に答えられる力を身に付けさせることが主眼になる。そもそも学校の授業も、2次試験に必要な実力を付ける貴重な時間なので、まず授業を大切にさせることが基本になる。その上で授業の演習などでやや手答えのある生徒に考えさせるような問題を織り交ぜるようにする。そしてセンター試験1か月前になったら、センター試験対策に集中する。

この時期になると2学期当初に立てた計画が一段落し、次に何をしようかと戸惑う生徒が出てきて、新しい学習方法に挑戦しようとすることがある。生徒によってはそのやり方で実力が付く場合もあるが、基本的には新しいやり方を試すより、今までの学習方法を継続させるべきだろう。

一方で、計画通りに行かなかった生徒の中には、「短期間で理解できる」といつたぐいの問題集や参考書に頼る者も出てくる。しかし、安易な気持ちで頼っても実力はなかなか伸びない。それよりも学校の授業を中心に、今までやった問題集や参考書を継続して使わせるようにする。

志望校の過去問題集はこの時期に買わせたい。本格的に取り組むのはセンター試験後でよいが、そのとき買おうとしても売り切れで書店に置いていない恐れがある。特に有名大学以外の過去問題集は早めに買わせた方が無難だ。毎年11月頃に『大学入試センター試験問題集 実施結果と試験問題に関する意見・評価』が大学入試センターから出される。前年度の試験に対する高校現場からの意見、評価と、入試センターの見解がまとめられているので、問題研究や指導に役立てたい。

12月初めまでに2次試験の力を  
学習方法は今までのやり方を続ける  
安易な参考書選びをさせない

## センター試験までの進路指導

(12月～1月)

step

受験校を最終的に絞り込む時期。生徒にはセンター試験で思い通りの点が取れた場合の第1併願パターンと、予想を下回った場合の第2併願パターンの組み合わせも決定するよう指導する。中にはあこがれ校をあきらめようとする生徒も出てくるが、現役は最後まで伸びると励まし、あきらめる必要はないことを理解させる。

そして、11月から12月に行われる三者面談で受験校を最終的に絞り込む。三者面談では生徒の希望を中心に結論を導くようにして、保護者には子ども

の希望を尊重する姿勢を促すようにしたい。

受験校を絞り込む際、入試科目についても再確認しておく必要がある。例えば文系の場合、地歴・公民をA大学は政治経済で受験し、B大学は日本史で受験するというのは非効率的であり、リスクも伴う。ほとんどの大学で共通して受験できる科目(例えば世界史や日本史)に一本化して、その科目に集

中させる方がよいだろう。

センター試験と2次試験の配点比率を押さえておくことも、効率的な入試対策にとって欠かせない。センター試験の比率がかなり高い大学を受験する場合は、通常より早めにセンター試験対策に取り掛かるといった指導も必要になる。また、各科目の配点比率が分かれば、各科目の勉強の強弱の付け方も明確になる。

後期試験の受験についても、この頃から生徒に意識させておきたい。後期試験が初めから頭にないと、前期試験がうまくいかなかった場合、それであきらめてしまつてしまつてしまう。前期試験で失敗した直後に、教師が「後期でも可能性がある」ともう一度奮起してがんばるようアドバイスしても、やる気をなくしてしまつていいるため、生徒は聞く耳を持たないことがある。最後まで可能性に懸けるためにも、この時期から後期試験を意識させて、チャンスは2回あることを理解させてお

くことが必要だ。

私立大については、入試スケジュールも考慮して受験校を最終決定させる。教師はそれをチェックして、試験日が重なっていないか、日程は無理がなく適正か、といったことはもちろん、例えば受験慣れしてから第1志望校を受けられるように併願校の受験をその前に持つてくるといったアドバイスをするなど、実践的観点も含めて指導する。

また、受験の経済的・肉体的負担を軽減し、さらに受験機会を増やすために、地方試験を積極的に利用することも戦術の一つとして考えたい。同一の大学、学部を複数回受験するチャンスが広がることも多い。特に設置学部数が少ない薬学や農学系などの学部・学科を志望する生徒に対しては、きめ細かく指導したい。

なお、願書の取り寄せは、私立大については問題ないが、国公立大の場合、センター試験終了まで受験校が確定しないため、いざ受験を決めたときその

## センター試験後の学習指導

step

2次試験対策、私立大対策は、やはり過去の入試問題集が中心になる。出願予定校の入試問題は少なくとも過去5年間分は解いて、完璧に理解できるようにさせる。さらにさかのぼれるなら、10年間分の入試問題に目を通せばその大学の出題傾向はかなりはつきりしてくる。大学によっては出題分野が比較的限定されていたり、同じような傾向の問題を出したりするので、過去の入試問題の研究は絶対に欠かせない。

答案の書き方も練習させておきたい。自分の言葉で表現する練習は、文理を問わずどの生徒にも必要である。例えば数学でも、1つの大問について解答用紙1枚すべてを使って書かせるといった問題が出ることもある。センター試験がマーク式のため、生徒は言葉で表現する勉強から遠ざかっている。過去問題に取り組むとき、答案の書き方を念頭に置いて解くように指導したい。

問題集を使う場合は、新しい問題集に手を付けるのではなく、前から使っているものをもつ一度解くようにする。その代わり、スピードアップするよう

に意識させる。最初20分かつたら次は15分、10分で解くつもりで取り組む。そうしていけば、その問題についての理解の定着がよりしつかりする。1つの問題を解いてそれで終わりにするより、同じ問題を繰り返して完璧にした方がはるかに効果的である。

いずれにせよ、センター試験後から2次試験まではある程度まとまった日数があるので、対策を立ててそれをこなす時間はある。決して焦ったり慌てたりしないように生徒に言うておきたい。また、「現役は最後まで伸びる」とも言い聞かせたい。

センター試験後は登校の機会が少なくなり、生活のリズムを崩しやすい。睡眠は十分に取れ、朝きちんと起きて昼間に勉強して、夜型の生徒は昼型に戻させる。本番の試験時間を意識してその時間帯に学習サイクルを合わせていくようにさせたい。

過去問題集中心の学習へ  
より早く正確に解く練習を  
焦らないような精神的ケアを

## センター試験後の進路指導

step

センター試験の結果を基にした志望校の合格可能性判定が返ってきたら、必要に応じて受験校決定のための最終面談を行う。

特に時間をかけたいたのは、センター試験の結果が思わしくなく、志望校を変えるかどうか決断を迫られている生徒だ。教師にもその見極めが難しいケースが多々ある。C判定でも、2次試験の力との兼ね合いで困難が予想される場合もあれば、逆にD判定でも、2次試験の力があるために合格の可能性がある場合もある。過去の模試結果や教科担当の意見、今年の志願者の動向や昨年度の合否状況などを踏まえ、総合的に判断する必要がある。

判定が微妙な生徒の場合、面談の場で第1併願パターンで行くか、第2併願パターンで行くか、あるいは新たな別の大学にするか、その場で決めることは簡単ではない。教師としては二者択一くらいのところまで持つていって「決断はきみに任せろ。家に帰って家族とよく話し合つてこらな」と、生徒に考える時間を与えるようにしたい。

大学の願書を取り寄せていなかったという事態が起こり得る。受験の可能性のある国公立大については、あらかじめセンター試験の前ですべて取り寄せるよう指示しておく。

三者面談で受験校を最終決定する  
2次試験の入試科目を再確認させる  
配点比率に目を向けさせる  
後期日程試験を早めに意識させる  
私立大入試は日程をチェックする  
地方試験を積極的に利用させる

私立大の入試とそれに続く合格発表の時期は、国公立大志望者にとっては意欲をなくしかねない時期でもある。国公立大が第1志望の場合でも、私立大に合格すると気が抜けてしまつて、意欲や緊張感が薄れてしまつてくるからだ。そういう状況の中で後期試験まで生徒を引っ張っていくのはなかなか難しい。2学期後半から時間をかけて第1志望校へのあこがれをかき立て、併願の私立大に受かつてもその気持ち揺らがないところまで第1志望への意欲を高めておく必要がある。

また、保護者の意識は生徒に敏感に伝わる。受験勉強をしてきた我が子の姿が気の毒になって、「合格した私立大でもいい」といふようなことを言つて、生徒のやる気はすぐにそがれてしまつ。最後の受験まで生徒の意欲を保たせるように、あらかじめ保護者にお願しいておきたい。

センターがよくない生徒を重点的に  
受験校最終決定は生徒に任せる  
安易に私立大進学を決めさせない

大学名	学部・学科・コース	入試科目(配点)	初年度納入金(授業料)
第1志望 慶大	法学部 法学科	国語(100) 英語(100) 数学(100) 社会(100) 総合(100)	1,100,000円 (427,000円)
	試験日	出願期間	発表日
第2志望 中大	法学部 法学科	国語(100) 英語(100) 数学(100) 社会(100) 総合(100)	1,000,000円 (427,000円)
	試験日	出願期間	発表日

志望校記入用紙の例(記入内容は、'99年度入試を基にしています)  
志望校の目処が付いたら、入試科目や入試日程などを書き出させてみる。私立大は、日程が重ならない限り何校でも受けられるが、無理のない日程になっていないかを確認することが必要だ。